

八百年を越える歴史を繋ぐ

松尾山のお田植祭

県指定無形民俗文化財

修験道の祭礼・松会

松会は天下泰平・五穀豊穡を祈る新春の農耕予祝神事です。いつ頃から始められたのかは定かではありませんが、近世資料の『中野坊旧記』に「永享四年（1432）より松柱を立てる」との記述があることや、「色衆衆」に中世田楽の名残を色濃く残していることから考えると室町時代頃に起源をもつと考えられます。

松尾山の松会は地願座・塩くみ・注連卸し・柱起し・神幸祭・田行事・色衆衆・幣切り・柱休めからなり、旧暦の二月十九日をもって終了となります。



上宮において祭典が終わると、御神体が神輿に納められ、下宮の御旅所へ神幸します。



お田植祭は、修験道最大の祭である「松会行事」のうち「田行事」が継承されたもので、神前で稲作の一連の所作を行い、五穀豊穡を祈る行事です。現在では、天下泰平を祈る勇壮な鉞舞（まさかりのまい）や長刀舞（なぎなたのまい）などの刀行事や獅子舞が復興されています。

郷土芸能の継承は後継者育成から

お田植祭は、1971年に福岡県青年大会「郷土芸能の部」で最優秀賞を、全国青年大会では優秀賞を受賞し、福岡県無形民俗文化財の指定を受けました。毎年4月19日直前の日曜日にお田植祭を開催。会員の高齢化が進む中、近年では30代の若手が加入し、英彦山神宮との交流をはかるなど保存会の活動は活発です。今後も松尾山の伝統が未来へと伝承されることを願っています。

松会保存会



修験道の霊山・松尾山の歴史

白雉三年（652）に行妙という修行僧が、始めて山頂に草庵を結び、仏道修行をしたのが松尾山のはじまりと伝えられています。その後、神亀五年（728）、英彦山法蓮の弟子、能行という僧が松尾山に寺院を建立し、山号を松尾山、寺号を医王寺と名付け勅許を得たといわれています。全盛期には、二十余りの坊があったと推定されます。

室町時代には松会も盛大なものとなり、松尾山十三末寺が決定され、八面山や檜原山の山伏達と共に峰入りを行うようになりました。その後、幾度となく堂宇が焼かれ、次第に山の勢いも衰えていきましたが、戦国末期の黒田氏や細川氏、小笠原氏からは厚い庇護を受けました。

この状況は江戸時代末まで続きますが、明治時代に出された神仏分離令で修験道が禁止されてからは、寺院としての姿はなくなり、神社として残るようになりました。

祭りの

天から神が降りてくる舞台

上毛のお神楽

国指定重要無形民俗文化財

豊かな自然に恵まれた里では、古くから谷筋ごとに「神楽」が継承されています。京築地域は、国内屈指の「神楽の里」。

上毛町では3つの神楽団体が活動しており、地域の人々によって大切に守られ、継承されています。神楽の舞は演目と呼ばれ、神降ろしの神楽と呼ばれる式神楽とリクエストによって奉納される奉納神楽に分けられています。



唐原神楽講

【とうばるかぐらこう】

明治30年代後半に「佐知の佐助」と広沢松次郎氏を師匠として、下唐原貴船神社の氏子の若者により組織されました。貴船神社への奉納のほか、地域の行事でも精力的に活動しています。



成恒神楽講

【なりつねかぐらこう】

明治10年代から矢幡社家に伝わる神楽が存在し、昭和10年頃まで舞われていましたが、後継者不足により中断。昭和55年に地元有志により「成恒神楽保存会」を結成。吉富神社を本社とし、華やかで力強い舞が特徴です。



友枝神楽講

【ともえだかぐらこう】

明治20年頃、「佐知の佐助」と広沢松次郎氏から東上・八社神社の氏子に伝えられたのが始まりです。現在は子ども神楽の指導をするなど、神楽の保存や後継者の育成に努めています。